

くりた しゅうへん
～ 栗田とその周辺の ～

れ き し
歴史めぐり

(栗田・鶴賀・高田・稲葉・川合新田編)



わたしたちが^す住^{くりた}む栗田と、その^{まわ}周りには、古^{ふる}くからこの^{ちいき}地域に人々^{ひとびと}が生活^{せいかつ}していたことを示^{しめ}す遺^い跡^{つた}、人々^{ばんしよ}の信^お仰^おに^お関^{かん}係^{けい}する神^{じん}社^{じゃ}・寺^{てら}や石^い造^{ぞう}文^{ぶん}化^か財^{ざい}、古^{ふる}くからの^い言^{げん}い^え伝^{でん}えがある場^ば所^{じょ}などを多^{おほ}くみることができ^{でき}ます。

それらの^{そんざい}存在^しを知^しり、また存在^{そんざい}する意^い義^ぎを理^り解^{かい}することによっ^よて、わたしたちの^{きやうど}郷^{たい}土^ちに^{あい}対^{ちやく}する愛^{ふか}着^あは、よ^より深^{ふか}まること^{こと}でし^しょう。

それでは、わたしたちの^{みちか}身^れ近^{きし}にある「^{たず}歴史^し」を訪^{たず}ねてみ^みま^まし^しょう。

目次

	P
① 「栗田新道」路傍の道祖神	1
② 鶴賀七瀬の変わった道祖神	2
③ 観音寺（鶴賀七瀬）	3
④ 「衢 大神」と庚申塔	4
⑤ 道 標	5
⑥ 南 俣神社	6
⑦ 芋井神社	7
⑧ 南向塚古墳（長野市指定史跡／昭和44年9月指定）	8
⑨ 瑠璃光寺	9
⑩ 千田城跡と金子氏古宅跡	10
⑪ 観音寺（中千田）	11
⑫ 専福寺	12
⑬ 養林寺と浄願寺	13
⑭ 芹田上神社	14
⑮ 森林鉄道の機関車	15
⑯ 「狗天伯社」と水神の石祠	16
⑰ 特色ある庚申塔と二十三夜塔	17
⑱ 芹田中神社	18
⑲ 川合壱田神社	19
⑳ 利久堂酒井家住宅（国登録有形文化財／平成13年12月4日指定）	20
【参考文献】	21

栗田とその周辺・歴史めぐりマップ

- | | | |
|----------------------------------|--|---------------------------|
| ① くりたしんどう 路傍の道祖神 | ② つるがななせ か どうそじん 鶴賀七瀬の変わった道祖神 | ③ かのんじ つるがななせ 観音寺(鶴賀七瀬) |
| ④ ちまたのだいじん こうしんとう 「衢大神」と庚申塔 | ⑤ どうひょう 道標 | ⑥ みなみまたたじんじゃ 南俣神社 |
| ⑦ いもい じんじゃ 芋井神社 | ⑧ なんこうづかこふん 南向塚古墳 | ⑨ るりこうじ 瑠璃光寺 |
| ⑩ せんだじょうあと かねこし 千田城跡と金子氏古宅跡 | ⑪ かのんじ なかせんだ 観音寺(中千田) | ⑫ せんふくじ 専福寺 |
| ⑬ ようりんじ じょうがんじ 養林寺と浄願寺 | ⑭ せりた かみじんじゃ 芹田上神社 | ⑮ しんりんてつどう きかんしゃ 森林鉄道の機関車 |
| ⑯ こまてんばくしゃ すいじん せきし 「狗天伯社」と水神の石祠 | ⑰ とくしよく こうしんとう にじゅうさんやとう 特色ある庚申塔と二十三夜塔 | ⑱ せりた なかじんじゃ 芹田中神社 |
| ⑲ かわいこんでんじんじゃ 川合壱田神社 | ⑳ りきゅうどうさ か い けいじゅうたく 利久堂酒井家住宅 | |



[illegible]

① 「栗田新道」路傍の道祖神

「道祖神」とは、その名からわかるとおり、道の神様です。道の傍や辻にまつられることが多く、旅行や交通安全にご利益があるといわれている他、地域自体の守り神とされたり、男女の良縁や子孫繁栄などにも霊験あらたかであるとされるなど、様々な性格をもった神様です。また形式は、「道祖神」の文字を記した石碑タイプや、男女の神様が並び立つ石像タイプ、文字も何もない丸石タイプなど、これまた様々ですが、栗田とその周辺地域では文字を記したタイプがほとんどです。

栗田の北から南に向かって伸びる「栗田新道」が、日吉神社の北200メートルほどの所で、東にカーブする地点のすぐ近くの路傍に、造立年代不詳の「道祖神」が1基、まつられています。御多聞にもれず、文字を記したものですが、ここでは、それに刻みつけられている「神」の字に注目してみましょう。旁（漢字の右半分の部分）である「申」の下部に「八」の字のように付け加えた部分があります。

このような「神」の字の書き方をした道祖神は、栗田の近辺では、他に中千田でもみられますが、このような字体の漢字は実際には存在しません。なぜ、このような書き方をしたのか、その理由は定かではありませんが、「八」の字は髭に似ていることから神様の威厳を示すため、あえて付け加えたものではないかという話を、筆者はどこかで、地元の方から聞いたことがあります。（もともと、確証は得られていません。）



特徴ある「神」の字の道祖神



高い道祖神

また、この神様のある場所からさらに200メートルほど東に進んだ路傍にも、さらに1基の道祖神がまつられています。こちらは寛政11年（1799年）に造られたもので、先に紹介したものよりも、かなり小さいものですが、その代わり、細長い石柱の上に高く据え付けられている点に特色があります。これまた、神様の威厳を示すため、あえて人の目線より高い位置に安置したものでしょう。ただ、石柱部分は後で追加されたものかもしれません。

なお、栗田と、その周辺地域では、ここで紹介した2基以外にも、多くの道祖神がみられます。その数の多さから、当時（江戸時代）、道祖神信仰がいかに盛んだったかを知ることができます。

② つるがななせ か どうそじん 鶴賀七瀬の変わった道祖神

鶴賀七瀬のスーパーマーケット「マツヤ」のすぐ北東の小路の傍に、ごつごつした石と、つるつるの丸い石とが並べておまつりされている、変わった石造文化財があります。これが、実は道祖神なのです。

このような形式の道祖神は、この近辺では他に見ることができませんので、大変珍しいものといえます。(栗田とその周辺地域でみられる道祖神のほとんどは「道祖神」の文字を記したものです。わずかに栗田北中に、卵型で文字のない、のっぺりした変わった道祖神がみられますが、これは1個の石のみで造られています。)

道祖神は、しばしば男女の像とされたり、あるいは男女を表す形の石を用いられたりして、おまつりされます。鶴賀七瀬のものは、向かって右側のごつごつした石が男神、



つるがななせ しぜんせきどうそじん まえ まるいし
鶴賀七瀬の自然石道祖神（前に丸石）

左側のごつごつした石が女神でしょう。ごつごつした様子で男性の荒々しさ・猛々しさを、また、つるつるした様子で女性の優しさ・美しさを表現したものと思われます。

(え、男と女が逆じゃないかって？ さあ… ねえ…!?)

また、ここの神様の場合、前に丸い石が供えられていることにも注目してみましょう。道祖神信仰と丸石とが結びついている例は、山梨県などに多くみられます。人が造ろうと思っても、簡単に造れるものではない丸石が、自然に生じたという不思議さの中に、昔の人々は「神」の力を感じ、おまつりしたものでしょう。ちなみに山梨県などでは、この丸石が、願いごとがかなう時は軽く持ち上げられるが、かなわない時は重くて持ち上げられないなどと信じられてきた所もあるようです。

いずれにせよ、ここの道祖神の場合、道の神様であるという以上に、男女の良縁や子孫繁栄にご利益のある神様であるという性格が、近在の他の道祖神と比べて、より強く表現されているように思われます。

なお、この道祖神の左隣には、石で造られた小さい祠（「石祠」といいます。）がありますが、これは「蚕神」（養蚕の守り神様）とのこと。

これらの神様については、いずれも建立年代はわかりませんが、少なくとも当時の人々の「願い」を、今に伝えてくれる、貴重な名残りといえます。

③ 観音寺（鶴賀七瀬）

栗田の周辺地域には「観音寺」という名の寺が多くあります。ここで紹介する「観音寺」は鶴賀七瀬にある曹洞宗（道元が13世紀前半頃に、当時中国にあった「宋」という国から教えを持ち帰り伝えた「禅宗」の一つ。「禅宗」は仏教の一派で、座禅修道を重視。）の寺で、本尊は十一面観音です。（観音は33の姿に変化して人々を救ってくれるといいです。十一面観音は、そうした変化観音の一つで、頭上に11の面＝顔をもちます。）



鶴賀七瀬の観音寺

かつては別の場所にあったようですが、寛保3年（1743年）現在地に観音堂が建立されました。その当時の名残として古い懸仏（地蔵菩薩）が残されているそうです。また、寛延3年（1750年）に境内に白山社（加賀白山にある神社）が勧請され、その後さらに稲荷社（正一位稲荷大神）も祭られて、今日に至っています。

この寺の境内には、地蔵菩薩の石像や庚申塔、二十三夜塔など、多くの石造文化財が安置されていますが、それらの中で特に注目すべきものは、文政年間（17世紀前半）に建立された馬頭観音（人々の様々な悩みを断ち切ってくれるという、変化観音の一つ。馬の守護仏ともされています。）の一面二手の立像でしょう。馬頭観音は、馬の供養のために建てられたことが多いようで、馬が多く飼われていた地域には多くみられるものですが、この近辺の地域については、他に荒木の北国街道沿いや川合新田で見られるくらいで、割と珍しいものです。街道沿いでみられる馬頭観音は、交通（人や荷物を運搬する馬）と深く関係があるように思われますが、観音寺にある馬頭観音の場合は、農耕（田畑を耕すのに利用された馬）と関係するものかもしれません。ただ、仮にそうだとしても、馬頭観音自体の数が少ないことから、この地域の農耕は、馬よりも牛を主に利用していたのだらうと推定できます。

このように、石造文化財の分布は、かつてのその地域の特色を、現在に知らせてくれることがあるのです。

馬頭観音の石像



④ 「衢 大神」と庚申塔

先に鶴賀七瀬にある珍しい道祖神を一つ紹介しましたが、鶴賀七瀬には、もう一つ、変わった「道祖神」があります。

七瀬中町に、「衢 大神」という、何やら難しい文字が刻まれた石碑が建っている一角があります。文化14年（1817年）に建てられたもので、年代的にはさほど古いものではありませんが、このような文字が刻まれた石碑は、もちろんこの近辺には他に例がなく、大変珍しいものです。

「衢」は、今では「巷」とか「岐」と書くことが多いですが、「道」の「股」からきた言葉で、要するに道の分岐点とか境界を意味します。その「衢」の神様、すなわち分かれ道とか境界にあって、邪悪なものの侵入を防いでくれる神様ということですので、「道祖神」と同じ性格の神様と考えていいでしょう。



七瀬中町にある
「衢 大神」(右)
と庚申塔の 祠

また、この神様の左隣には庚申塔があります。こちらの建立年代は不詳ですが、入母屋型の屋根を持ち、2羽の鶏と2匹の猿が刻み付けられている、この地域では他にもいくつかみられる形式の庚申塔です。

庚申塔とは、中国の宗教を起源とする「庚申信仰」により建てられた石碑です。

この信仰によれば、人間の体内にいる「三尸」という虫が、庚申の日の夜に体内から抜けだし、天帝にその人の悪事を報告するため、早死にしようとしてしまいます。

そこで、それを防ぐため、庚申の日の夜には徹夜して宴会などをする習わしがあり、これを「庚申講」とか「庚申待ち」といいます。庚申の日は、昔の暦で使われていた「十干（甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸）・十二支（子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥）」の中の、「庚」と「申」の組み合わせに当たる日で、60日ごとに回ってきます。

⑤ 道 標

「あずま通り」の「七瀬南部」の交差点から、東に分かれてすぐの三叉路の路傍に、文化6年（1809年）に建立された昔の石造の「道標」が1基、設置されています。

「道標」とは「道しるべ」のことで、碑面には「左 たかだ 大豆嶋わたし ほしな」と読めます。（「たかだ」＝「高田」、「大豆嶋」＝「大豆島」、「わたし」＝「渡し」、「ほしな」＝「若穂保科」）つまり、ここを左に行けば、高田や、大豆島にあった犀川の渡し場を経て、若穂保科に行けるということを示したものです。

今のように、しっかりした地図や、またGPSやナビゲーションのような便利な機器もなかった時代にあっても、このような道標の存在は旅人にとって大変、ありがたいもの



道標のある三叉路

また、この道標の上部には、石仏の浮彫が施されていますが、これはもちろん旅人の安全を祈念したものでしょう。当時、この道標を設置した地元の人々の、細やかな心遣いをうかがい知ることができます。

なお、上記の「左 たかだ 大豆嶋わたし ほしな」の文字の右側には、やや細く小さい字体で「慈悲の国はにくしと 思うものもなし つみある人を あわれまします」と刻まれており、仏様の大きな慈悲を説いています。

この文言からすると、上部に施された石仏の浮彫は、おそらく地藏菩薩でしょう。

地藏菩薩は俗に「お地蔵さん」といわれて、最も親しまれている仏様です。人々の日常生活の中で、ありとあらゆる願いごとを聞いてくださる仏様で、大地の慈悲を仏様の姿として、象徴的に表したものであるとされています。



上部に石仏の浮彫のある道標

⑥ みなみまたじんじや 南俣神社

くりた ひがし みなみまた ちく ふる うぶすながみ ちい き むかし まも がみ
栗田の東にあたる南俣地区にある、古くからの産土神（この地域の昔からの守り神）
さいじん たけみなかたのみこと す わ す わ じんじや さいじん おおくにぬしのみこと だいに し
で、祭神は健御名方命（諏訪にある諏訪神社の祭神で、大国主命の第二子にあたり、
のうこう ちんじゆ ぶうん さまざま ご しんとく かみさま うけもちのみこと いいづなじんじや
農耕・鎮守・武運など、様々な御神徳があるとされている神様。）と保食命（飯縄神社の
さいじん しょくもつ つかさど かみさま
祭神で、食物を司る神様。）です。

みなみまた おもしろ ちめい な じつ すそばながわ なが ゆらい すそ
「南俣」とは、面白い地名ですが、その名は実は裾花川の流れに由来するものです。裾
ばながわ いま あさひやま さんろく ながのしがいち さ みぎ なんか たんぼじまふきん
花川は、今では旭山の山麓で長野市街地を避けるように右カーブして南下し、丹波島付近
さいがわ ごうりゅう いま けんちようふきん つるがななせ ななせ とうじ すそ
で犀川に合流していますが、かつては今の県庁付近から鶴賀七瀬（「七瀬」も、当時の裾
ばながわ なが ゆらい ちめい みなみまた へ やしまふきん さいがわ ごうりゅう げんざい
花川の流れに由来する地名です。）、南俣を経て、屋島付近で犀川に合流しており、現在
ながのしがいち にし ひがし よこぎ なが げんざい みなみまたじんじや
の長野市街地を西から東に横切るように流れていました。そして、現在の南俣神社のあ
るあたりが小高い平地になっており、川の流れを左右に分けていたことから「水俣」と呼
ばれ、それが後世に転化して「南俣」になったといわれています。そんなところから、南俣
じんじや じもと すいなん よ かみさま ふか しんこう のち
神社は地元では水難除けの神様として深く信仰されてきたようです。（ちなみに、後の
ちすいこうじ すそばながわ げんざい なが せいぎぜんはんごろ
治水工事により、裾花川が現在の流れとなったのは、17世紀前半頃のことです。）

じんじや そうけん じ き ふめい てんしやう ねん ねん みなまた みや しゃでん
この神社の創建時期は不明ですが、天正6年（1578年）に「水又の宮」として、社殿
こんりゅう でんしやう とうじ すわしや よ
が建立されたとの伝承があるそうです。当時は「諏訪社」と呼ばれていたようですが、
みなみまたむら たんじやうご か えい ねん ねん
「南俣村」の誕生後、嘉永3年（1850年）
みなみまたじんじや かいしやう
に「南俣神社」と改称されました。

げんざい じんじやほんでん てんぼう ねん ねん
現在の神社本殿は天保3年（1832年）に
さいけん
再建されたものだそうです。



みなみまたじんじや ちか すそばながわ なが
南俣神社（かつて近くを裾花川が流れていた）

さいてん はるまつ がつ かげしずめのまつり がつ
祭典は春祭り（5月）、風鎮祭（8月）、
あきまつ がつ しんこくかんしやさい がつ おおほらえ
秋祭り（10月）、新穀感謝祭（11月）、大祓
しき がつ えつねんさい がつ がんたんさい がつ
式（12月）、越年祭（12月）、元旦祭（1月）と、年間を通じて数多く行われています。

けいだい めいじ ねん ねん みなまたてんまんぐう こんりゅう すがわらのみちざねこう
なお、境内には、明治24年（1891年）に「南俣天満宮」が建立され、「菅原道真公」
へいあんじだい せいじか ずのうめいせき し さいせいき うだいじん にん
（平安時代の政治家で、頭脳明晰をもって知られ、最盛期には右大臣に任じられたこと
じんぶつ だざいふてんまんぐう さいじん がくもん かみさま しんこう あめのた
もある人物。太宰府天満宮の祭神で「学問の神様」として信仰されています。）と「天手
ちからおのみこと あまてらすおおみかみ あま いわや かく ぜんせかい やみ か さい かいりき
力雄命」（天照大神が天の岩屋にお隠れになり、全世界が闇と化した際、その怪力に
いわや とびら ひら あまてらすおおみかみ ふたた みちび だ かみさま そうけん かみさま
より、岩屋の扉を開いて天照大神を再び導き出した神様。そこから「壮健の神様」
しんこう あわ
として信仰されています。）が併せてまつられています。

⑦ いも い じんじゃ 芋井神社

ここで、栗田の周辺地域（＝芹田地区）の範囲とするには、やや遠くなりますが、南俣のすぐ北の「高田」地区にある、このあたりでみられる唯一の古墳「南向塚」付近まで足を延ばしてみることにします。まずは「南向塚古墳」に隣接していて、同古墳ともきわめて深い関係にある「芋井神社」に立ち寄ってみましょう。

この神社は、地元では古くから産土神として篤く信仰されてきたようで、五穀豊穰・家内安全・商売繁盛などに御利益があるとのこと。創建年代は定かではありませんが、境内に設置されている案内看板によれば、正和年間（1312～1316年）に、南向塚古墳の上と若宮との2か所にまつられた神社が、戦国時代の天文年間（1532～1554年）に、戦で焼失してしまったのを機に、両神社を1つに統合し、現在地に新たに神社を建立したものだそうで、当初は「諏訪社」と呼ばれていましたが、明治13年（1880年）11月17日に「芋井神社」と改称されたそうです。また、主祭神は南方止賣命（女神、健御名方命の妃である八坂刀売命の別名か？）、配神（主祭神でない祭神）は南方止美命（男神、健御名方命の別名）とのことです。

この神社は平成に入ってから大修理を行っていますが、その際に調査した結果、文化6年（1809年）8月15日に「御幣殿造立」したとの記述のある棟札が発見されたそうです。

（「幣殿」とは、神社におまいりする人が「幣帛」＝捧げ物を供えるための建物で、「本殿」と「拜殿」との間に設けられます。）

祭事は、元旦祭（1月1日）、祈年祭（4月第2日曜）、例祭（9月第4日曜）、感謝祭・大祓祭・交通安全祈願祭（12月第2日曜）です。

なお、境内には「日支事変記念」の碑や、「紀元二千六百年」の刻印のある水鉢がみられます。（「日支事変」は、「支那事変」「日華事変」ともいい、昭和12年＝1937年に勃発した、中国との戦争状態のことです。また「紀元」は「皇紀」ともいい、神武天皇即位の年から数えた年数で、「西暦」とは別のものです。昭和15年が「紀元二千六百年」の節目の年にあたるとされ、各地で祝典が行われました。）いずれも、先の戦時下の遺物ですが、神社の境内に置かれていることから、当時の人々の、国家の安泰や出征兵士の無事を祈る心がうかがえます。

南向塚古墳」と関わりの深い芋井神社



⑧ 南向塚古墳（長野市指定史跡／昭和44年9月指定）

芋井神社のすぐ北の小道を、東にわずかにたどると、南向塚古墳があります。

この古墳は、形はやや崩れてはいるものの「前方後円墳」（円形と方形の墳丘を組み合わせた形状の古代の墳墓。大阪府堺市にある「仁徳天皇陵」が代表例。）の形態をしています。築造年代は、古墳時代（3世紀～7世紀）後期にあたる6世紀頃と推定されていますが、定かではありません。また、善光寺平の前方後円墳の大部分が山や丘の上には築造されている中、この古墳だけは、なぜか平地のど真ん中に築造されている点が謎とされています。出土品も、明治43年（1910年）頃に、後円部東北斜面の木の根方から勾玉が2個発見されただけで、実のところ、この古墳に関しては、昔から様々な憶測や言い伝えはあるものの、よくわかっていないというのが本当のところのようです。

例えば、現地には昭和4年11月に記された古い案内看板がありますが、それによれば、この塚は別名を「王塚」といい、第8代孝元天皇の皇子「少名日子建猪心尊」が、勅（天皇の命令）により当地の開墾にあたり、亡くなられたのを地元民が葬った所であるとしています。また『長野県町村誌』には、甲斐（現在の山梨県）の武田信玄と越後（現在の新潟県）の上杉謙信とが争った「川中島の戦い」（1553年～1564年頃）の際の、上杉方の陣地の跡であるとか、あるいは合戦による戦死者を埋葬した地で、本来「長尾塚」と書くべきところを後世誤って「南向塚」としたなどの説を紹介しています。（上杉謙信は上杉を



名乗る前、長尾輝虎と称していました。）

南向塚古墳

いずれの説にしても確証はありませんが、この塚の位置（所在地）や、後円部に馬頭観音がまつられている堂（享保4年＝1719年に造られた石造三面観音像と、明治時代に造られた木造観音像が安置されています。）があること、さらに先に紹介した「芋井神社」の伝承において、この塚の上にまつられた神社が、天文年間に戦で焼失したとされていることなどから考えれば、少なくとも「川中島の戦い」をはじめとする、この地方に関係する戦に際して、多かれ少なかれ、何らかの関係があったことが想像できます。

⑨ 瑠璃光寺

南向塚古墳から、国道18号に沿って南へ進むと、中千田交差点のやや北に「瑠璃光寺」という難しい名前の寺があります。「薬師如来」と「阿弥陀如来」という2つの本尊をもつこの寺こそ、実はこの地域でも有数の古い歴史をもつ寺なのです。

（「瑠璃光」とは、薬師瑠璃光如来＝薬師如来を意味します。仏教には、東・西・南・北の四方に仏の国があるという考えがあり、その教えによれば、東方瑠璃光世界に薬師如来、西方極楽浄土に阿弥陀如来、南方現世に釈迦如来、北方弥勒浄土に弥勒菩薩が、それぞれ教主として存在するとしています。薬師如来は、東方瑠璃光世界の教主で、人々の病苦を救ってくれるなどの功德があるといわれています。）

この寺は現在は浄土宗ですが、もとは真言宗の古寺で本尊薬師如来と神将（薬師如来の眷族）の像を安置したといえます。開基は天平9年（737年）との言い伝えがありますが、確証はありません。また、地元の人々が病人の平癒を祈ったことから「痾瘡堂」ともいわれていたそうです。

（浄土宗は、法然によって開かれた知恩院を総本山とする仏教の一派で、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えると、誰でも西方極楽浄土へ迎えられと教えています。また、真言宗は、空海＝弘法大師によって開かれた仏教の一派で、大日如来を宇宙と一体・絶対の真理であるとしています。）

治承4年（1180年）、雷で焼失し、寛元2年（1244年）、千田親清が再建して菩提寺としましたが、永正14年（1517年）、犀川の水害で流失したため、現地に移されました。（墓所には千田氏の墓が数基残されています。）その後、永禄年間（16世紀半ば）に千田氏が没落したため、しばらくの間は地元の人々が協力して寺を守っていましたが、元和元年（1615年）になって、寂照知鑑が中興開山し、このとき真言宗から浄土宗（本尊阿弥陀如来）に改められました。

現在、宝形造り（平面形が正方形で、棟が頂上に集まる形式の屋根の造り。「方形造り」ともいい、寺院建築に多くみられます。）の本堂には、薬師如来や十二神将の見事な像が安置されています。また、阿弥陀堂は明治14年の再建で、これまた見事な阿弥陀如来像などが安置されています。

境内には、いくつもの石造文化財がみられますが、中でも石造の阿弥陀如来座像は、宝永3年（1706年）の造立で、長沼・安茂里のものについて古いものだそうです。

また、この寺の境内にある庚申塔も、後述の芹田上神社にあるものと同じ明暦3年（1657年）の造立という古いもので、一見の価値があります。



るりこうじ しんしょうぞう
瑠璃光寺の神将像

るりこうじ
瑠璃光寺



⑩ 千田城跡と金子氏古宅跡

瑠璃光寺のすぐ南にあたる、現在、国道18号の中千田交差点があるあたりは、かつて、この地域における古くからの豪族であった千田氏の居城があったところです。

千田氏は、初代の千田仲清から 10代目の千田信親まで約400年間、中千田に在住していた一族です。前述の瑠璃光寺は2代目の千田親清が創建し、以後、同寺が千田氏代々の菩提寺となっていたほか、5代目の千田有親は後述の専福寺を創建するなど、千田氏はこの地域に数々の顕著な足跡を残した名族でしたが、天文22年（1553年）、10代目の千田信親は坂城の村上義清と共に、甲斐の武田信玄と上田原で戦って敗北し、上杉謙信を頼って越後に逃れ、そのまま二度とこの地に戻ることはありませんでした。

千田城は、瑠璃光寺創建者でもある2代千田親清によって、13世紀前半頃に築城され、以来、千田氏代々の居城となっていました。千田氏が没落した後は、甲斐の武田信玄に支配され、その後廃城となりました。

『長野県町村誌』によれば、この城跡は五稜形（五角形）をしていて、本郭の周囲には土手や濠があり、さらにその外側を郭がとりまいていたほか、本郭の西に「雲中舎」と称する高所（かつて千田氏が閑居していた遊亭の跡地）があったとのことですが、現在では、残念ながら城の面影をうかがえるものは全く残っていません。

なお、千田城跡のすぐ西にも、戦国時代に築かれたという館跡があります。こちらは千田氏没落後の天正年間（16世紀後半）にこの地に入り、後述の観音寺の創建者でもある金子式部正範の館跡で、そのあたりには現在でも子孫にあたる「金子」姓の家が所在しています。当時の痕跡は千田城跡と同様、現在ではほとんど見ることはできませんが、館跡の一角には金子家で古くからおまつりしてきたと思われる「八幡宮」の祠があり、わずかに往時の雰囲気を感じることができます。

⑪ 観音寺 (中千田)

栗田の周辺地域に多くある「観音寺」のうちの一つです。善光寺近くにある寛慶寺の末寺で、宗派は浄土宗、本尊は阿弥陀如来(享保6年=1721年の造立)です。また十一面木造観音菩薩立像・地藏菩薩なども安置しています。

(ちなみに寛慶寺の前身は、戦国時代以前に栗田にあった「栗田寺」でした。同寺は天正15年=1587年に善光寺近くに移転し、寛慶寺と改称しました。)

この寺の開基は金子式部正範といいます。彼は上野国(現在の群馬県)沼田城主真田昌幸の城代金子美濃守正忠の子で、天文20年(1551年)、上野国吾妻郡金子村に生まれ、甲斐の武田勝頼の配下でしたが、天正3年(1575年)25歳の時に千田村(現在の中千田)に来て、寛慶寺の洞誉春虎和尚の教えを受けました。彼は千田村に48年間住み、寛永元年(1624年)に74歳で死去しましたが、その屋敷を正徳元年(1711年)に寺としたのが、現在の観音寺の始まりとのことです。

この寺は以来、金子一族の菩提寺として今日に至っています
が、老朽化のため平成10年(1998年)6月に再建されました。



観音寺 (右奥)
と高札場



「軻遇突智命」の
碑と道祖神

境内には数基の地藏菩薩の石像がみられ、また寺の周囲にも、道祖神、庚申塔など、いくつかの石造文化財がみられますが、それらのうち道祖神は、先に紹介した、栗田の「栗田新道」路傍の道祖神のうち、西にあるものと同様、「神」の字の傍の「申」の下部に「八」の字のように付け加えた部分がある点に特色があります。

また、「軻遇突智命」の石碑も付近では他にみられない珍しいものです。「軻遇突智命」は、日本最古の歴史書である『古事記』『日本書紀』の「国産み」の神話に登場する火の神で、伊邪那岐命(男神)と伊邪那美命(女神)の間に最後に生まれた子でしたが、その火のために伊邪那美命は大火傷を負い、亡くなってしまったとされています。火を司る神様であることから、防火・鎮火の守り神様として広く信仰されています。

なお、寺の脇にみられる高札場(江戸時代に、当時の法律やきまりなどを掲げた場所。)の遺構も、かつての様子を今日に知らせてくれるものの一つです。

⑫ 専福寺

先に紹介した観音寺の南にある、浄土真宗本願寺派の寺で、本尊は阿弥陀如来です。

(浄土真宗は、法然の弟子の親鸞が、浄土宗の教えをさらに発展させたもので、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えることにより、人が西方極楽浄土に迎えられるのは、阿弥陀如来の本願力=他力によるものであると教えています。本願寺派は、京都の西本願寺を総本山とする浄土真宗一派で、「真宗西派」などとも呼ばれます。)

言い伝えによれば、この寺は、延慶3年(1310年)、千田太郎有親が父・仲親の菩提を弔うために創建した「千福寺」が始まりで、応永年間(1394年～1428年)に「専福寺」と名称を改めたといわれています。

また、天正5年(1577年)には、「一向一揆」を起こして織田信長に包囲されていた石山本願寺を援助するため、兵糧10俵を送ったと伝えられています。

一向一揆とは、浄土真宗本願寺派(当時、一向に阿弥陀如来を信ずるというので「一向宗」と呼ばれていました。)の僧侶と門徒の民衆層によって起こされた大規模な一揆(時の支配者に対する反抗)で、長享2年(1488年)、加賀(現在の石川県南部)の守護・富樫政親を攻め滅ぼすほどの勢力を誇りました。しかし、天正8年(1580年)、織田信長との抗争に敗れ、拠点の石山本願寺が退去した後は、衰退しました。

現在の本堂は、平成5年に改築されたものです。



境内には、乃木希典の筆による「日露戦役忠魂碑」が、ひときわ大きく目を惹きます。(乃木希典は、明治時代の日本陸軍の将軍で、1904年～1905年にかけて日本がロシアと戦った「日露戦争」では、陸軍第3軍の司令官として、当時難攻不落といわれた朝鮮半島の旅順にロシアが築いた要塞を、3度の総攻撃の末、ついに攻略したことで有名です。)

乃木希典筆の「日露戦役忠魂碑」

専福寺



また、この寺には、明治6年(1873年)6月から明治19年(1886年)3月まで、芹田小学校の前身の一つであった「励精学校」が置かれており、寺の敷地の東の縁には、この学校の教師であったという塚田犀陽(本名:親好)先生の功績をたたえる碑が建てられています。

なお、この学校には、勝海舟が見学に訪れたことがあり（明治14年）、彼は生徒の授業態度に感動して庫裏で筆をとり、雄渾な筆致で「励精学校」としたためました。その額は、今も芹田小学校に大切に保管されています。

（勝海舟は、江戸時代末期～明治時代に活躍した人物で、万延元年＝1860年に日本初の太平洋横断を果たした「咸臨丸」の艦長、明治維新時に江戸幕府が江戸城を無血開城した際の幕府側代表などとして有名で、日本海軍の創設者としても知られています。）

⑬ 養林寺と浄願寺

専福寺を取り巻くように、小さいお寺が

2つあります。

まず、専福寺と道を隔てた反対側にあるのが「養林寺」です。



ようりん じ
養林寺

この寺は、専福寺と同じ浄土真宗の寺で、本尊は阿弥陀如来です。言い伝えによれば、延慶3年（1310年）、千田太郎有親の家臣であった熊木大助が浄土真宗（一向宗）を篤く信仰し、本願寺の覚如上人の弟子となって大泉と号したところ、千田太郎有親が元は天台宗（最澄が開いた仏教の一派で、「妙法蓮華経」＝「法華経」を根本經典とし、総本山は比叡山延暦寺。）であった養林寺の荒廃したのを再建して、大泉を住職とし、浄土真宗に改めたものであるといえます。

後、明和4年（1767年）に専福寺の塔頭（寺院に付属する小寺院のことで、高僧が隠退後に住んだりします。）となりましたが、明治10年（1877年）に独立しました。

次に、専福寺のすぐ左手前の脇にあるのが「浄願寺」です。

これまた専福寺と同じ浄土真宗の寺で、本尊は阿弥陀如来です。言い伝えによれば、上杉輝虎（後の上杉謙信）の武将であった、越後米山城主の柿崎和泉守の家臣の籠島源五左衛門が、永禄年間（16世紀半ば）に柿崎和泉守が没落した後に、浄土真宗の僧となって智円と号し、中千田に来て専福寺の客僧となっていたところ、その子の源太郎もまた専福寺の弟子となって智源と号し、永禄12年（1569年）8月、智源によって浄願寺が創建されたそうです。

その後、元禄4年（1691年）に専福寺の塔頭となりましたが、弘化4年（1847年）の善光寺地震で倒壊してしまいました。間もなく復旧されたものの、老朽化が進んだことにより、最近になって全面的に取り壊されてしまったのが残念です。（平成24年3月現在、まだ再建されていません。）

⑭ 芹田上神社

栗田地区と東から南東にかけて接する稲葉地区には、「上」「中」「下」と付く3つの神社がまつられています。すなわち、「芹田上神社」（中千田）、「芹田中神社」（母袋）及び「芹田下神社」（日詰）です。

これらの神社は、いずれも、かつてはそれぞれの地区の産土神として信仰されてきたものですが（したがって、祭神はそれぞれ別）、明治11年に現在の名称に改められ、祭日も同じ（毎年5月15日・9月15日）であること、また、3つの神社が同時におまつりされたという伝承があることなどの点で共通しています。（もっとも、正確な創建時期はわかっていません。）

ここでは、それら3つの神社のうち、観音寺や専福寺のすぐ西にある「芹田上神社」を訪れてみましょう。



芹田上神社

この神社の祭神は「建志名神」です。（諏訪神社の祭神である健御名方命の子にあたり、八ヶ岳連峰蓼科山に鎮座する神様で、蓼科神、また立科神とも書きます。）古くは「八生社」とか「八生大明神」と称していたようですが、前述のとおり、明治11年に現在の名称に改められました。また、境内地は千田讃岐守の寄進によるものといわれています。

境内には、本殿の東に樺の巨木があります。地元の人々はこれを神木といい、祭日には今も垂を付けて（注連縄に白紙を垂れ下げて）祭るそうです。

境内にはこの他、瑠璃光寺にあるものと同じ明暦3年（1657年）に造立された、入母屋型の屋根を有する古い庚申塔がみられますが、こちらは瑠璃光寺のものに比べ、かなり表面の磨耗が進んでしまっているのが残念です。

⑮ しんりんてつどう きかんしゃ
森林鉄道の機関車

ここで、一旦、栗田の町内に戻り、ちょっと今までとは変わった歴史遺産を見てみることにしましょう。

南部小学校の南の「あずま通り」沿いにある中部森林管理局の前庭に、古く小さいディーゼル機関車が展示されています。この機関車は、木曽谷にある木曽郡上松町～王滝村の間に敷設されていた森林鉄道で使われていたものです。

同地の森林鉄道は、大正3年3月、長野県初の森林鉄道として開通し、当初は蒸気機関車が用いられていましたが、昭和26年からディーゼル機関車に代わり、昭和50年3月に廃止されるまでの間、「木曽五木」などの木材を運んでいました。（「木曽五木」とは、ヒノキ、サワラ、ネズコ、アスナロ、コウヤマキの5種の針葉樹で、いずれも木材用として古くから珍重されているものです。殊に木曽で採れる木材は良質とされ、伊勢神宮など多くの著名な木造建造物に利用されてきました。ちなみに上松駅には、それらの木材を運送するため、今でも大規模な集積所があります。）

森林鉄道は、最盛期には木曽谷以外にも各所に通じていましたが、その後、木材の運搬手段はトラック主体の運搬へと次第に移行していき、それにつれて各地の森林鉄道も次々に廃止され、やがて木曽谷の森林鉄道が日本唯一の森林鉄道となってしまいました。

そして、昭和50年3月、同地の森林鉄道もついに廃止となり、日本から全ての森林鉄道が姿を消すことになりましたが、それを機に、森林鉄道の歴史を後世に末永く伝えていくため、昭和51年から中部森林管理局の前庭に木曽森林鉄道の機関車が資料展示されることになりました。

これは、栗田やその周辺地域で直接使用されていたものではなく、その意味ではこの地域との関係はさほど深いものとはいえませんが、今ではほとんど目にするのことができない貴重な機関車であり、それを身近に見学できるのは、大変嬉しいことです。



しんりんてつどう きかんしゃ ひだり きやくしゃ うえ
森林鉄道の機関車（左）と客車（上）

⑩ 「^{こまてんばくしゃ} 狗天伯社^{すいじん}」と^{せき し} 水神の石祠

^{くりたびょういん} 栗田病院^{きた}の北^{くりたしゃりでん}にあたる栗田舎利田^{ちゅうしゃじょう}の駐 車 場の^{なんせいすみ} 南西隅に、^{せき し} 2つの石祠が^{なら}並んでまつられて^{いっぼう か}いる一風変わった^{いっかく}一角があります。

正面^{しょうめん}の鳥居^{とりい}に^{まわ}回ってみると、鳥居^{とりい}の額^{がく}に「^{こまてんばくしゃ} 狗天伯社^{すいじん}」という、面白い^{おもしろ}名前の^{なまえ}神社名^{じんじやめい}が記^{しる}されており、鳥居^{とりい}をくぐった^{さき}すぐ先^むには、向^{むか}かって左側^{ひだりがわ}に「^{すいじん} 水神^{まつ}」を祀^{まつ}っているといわ^{せき し}れる石祠^{みきがわ}が、また右側^{こまてんばくしゃ}に「^{せき し} 狗天伯社^{ちん ざ}」といわれる石祠^{せき し}が鎮座^{ちん ざ}しています。

これらは、いづれも^{ぞうりつねんだいふしょう}造立年代^{きんぺん}不詳^{ほか}ながら、この^{れい}近辺^{めずら}には他にあまり例^{れい}のない、珍^{めずら}しい^{かみさま}神様^{せき し}の石祠^{かみさま}です。

「^{すいじん} 水神^じ」は、その字^{みず}のとおり^{かみさま}水の神様^{のうぎようようすい}で、かつては農 業用水^{まも}の守^{がみ}り神^{ほうさくき がん}、すなわち豊作祈願^{かみさま}の神様^{ひとびと}として人々に^{しんこう}信仰^{しんこう}されていました。^{ほか}（他に若里^{わかさと}などでも同種^{どうしゅ}のものを^み見る^みことがで^ききます。）

一方^{いっぼう}、「^{こまてんばくしゃ} 狗天伯社^{きんぺん}」については、この^{ゆいいつ}近辺^{さいじん}では唯一^{なぞ}のもので、祭神^{さいじん}すら^{なぞ}わからない謎^{なぞ}の^{かみさま}神様^{じんじや}です。^{ちい}（この神社は、小^{ちい}さいながら『^{ながのけんちようそんし} 長野県町村誌^{けいさい}』にも掲載^{さいじん}されていますが、祭神^{かみさま}・^{かんじようねんげつ}勧請^{ふしょう}年月^{ふしょう}については「^{さいじつ} 不詳^{がつ}」とあり、ただ祭日^{にち}が3月25日^{にち}とあるのみです。）

ちなみに「^{てんばく} 天伯^な」と名^{じんじや}のつく神社^なは、長野^な県^なでは南信^なの天龍川^な流域^なに多く^なみられるよ^なう^なです^なので、それらのうち、いづれかの「^{てんばくしゃ} 天伯社^{かんじよう}」を^な勧請^なしたもの^ななのかも^なしれません。
また、頭^{あたま}につく「^{こま} 狗^も」の文字^もからは、「^{てんぐ} 天狗^{やまいぬ}」あるいは山犬^{おおかみ}= 狼^{れんそう} などが連想^{れんそう}されるので
（「^{こま} 狗^よ」は「^{さんかくしゅうきよう} いぬ^{なん}」とも読み^{かか}ます）、山岳^{おも}宗 教^{おも}と何^{おも}らかの関わり^{おも}があり^{おも}そうに思^{おも}われます。

その「^{こまてんばくしゃ} 狗天伯社^{ほこら}」の祠^{すいじん}が、水神^{ほこら}の祠^{すいじん}とセットでまつられているからには、やはり、^{のうこう}農耕^{のうこう}の守護^{しゅごしん}神^{しゅごしん}としての意味^い合いが^あ強いと^い考^いえて^いいいのでは^いない^いで^いしょう^いか。^い（つまり、「^{みず} 水^{みず}」は一旦^{いったん}「^{やま} 山^{たぐわ}」に蓄^{たぐわ}えられ、そこから川^{かわ}とな^なって流^{なが}れ下^{くだ}って^なきます^なので、「^{やま} 山^{みず}」と「^{みず} 水^{みず}」の^{りようしゃ}両^{あわ}者を併^{あわ}せておまつりする^い意義^いは^い大^いきい^いのでは^いない^いか^いとい^いうこ^いと^いです。）



「^{すいじん} 水神^{ひだり}」（左）と「^{こまてんばくしゃ} 狗天伯社^{せき し}」の石祠

「^{こまてんばくしゃ} 狗天伯社^{さいじん}」の祭神^{いじよう}がわからない以上^{いじよう}、これは、あくまで推測^{すいそく}の域^{いき}を出^でるものではありませんが、このように、^{とうじ}当時^{もよう}の模^も様^{よう}について、あれこれと想像^{そうぞう}し、思^{おも}いをめぐ^{おも}らして^{おも}みる^{おも}ことが^{おも}できる^{おも}のは、歴^{れき}史^しの面白^{おもしろ}さの^{ひと}一つ^{ひと}です。

いづれにせよ、これらの石祠^{せき し}が、少^{すく}なくとも昔^{むかし}の^{くりた}栗田^{ひとびと}の人々^{なん}の、何^{なん}らかの切実^{せつじつ}な願^{ねが}いから^{かんじよう}勧請^{かんじよう}され、^{こんりゆう}建^ま立^{ちが}されたものであることは間違^{まちが}いありません。

⑰ 特色ある庚申塔と二十三夜塔

栗田東組の閑静な街中に、庚申塔と二十三夜塔が設置されている一角があります。

ここにある庚申塔と二十三夜塔には、いずれもその碑面の文字の上に、付け加える形で何らかの印が刻みつけられている点に特色があります。

まずは庚申塔です。これは寛政12年（1800年）に建立されたもので、「庚申塔」の文字の上に「〇」印が刻みつけられた変わったものです。もっとも、この「〇」印が何を意味するものなのかは、よくわかりません。



「〇」印のある庚申塔



「サク」の種字が刻まれた二十三夜塔

次に二十三夜塔です。これについては造立年代は不詳ですが、「二十三夜塔」の文字の上に薄く「サク」と読む「種字」が刻みつけられています。

種字とは仏や菩薩を梵字（インドで発祥した文字）で表したもので、「サク」は勢至菩薩を意味するものだそうです。（勢至菩薩とは、智慧の光で一切を照らし、人々にこの上ない力を得させるという菩薩。「菩薩」とは悟りを求める人という意味。）

二十三夜塔は、江戸時代の半ば過ぎ（18世紀ころ）から盛んになった「二十三夜講」（月を信仰して拝む「講」＝「月待」の中で、もっとも広まったもの。）の人々により、供養の記念に建てられた石碑です。この講では、月を「勢至菩薩」の化身として拝み、おまつりしていました。このことから、栗田東組の二十三夜塔に、勢至菩薩を意味する種字の「サク」が刻みつけられた理由を理解することができるでしょう。

⑱ せりた なかじんじゃ
芹田中神社

それでは、また栗田から離れ、今度は、母袋から川合新田の方面に訪れてみましょう。
まずは母袋の「芹田中神社」です。

この神社の祭神は「伊豆早雄 命」(「出速雄神」ともいい、諏訪神社の祭神である健御名方命の孫にあたる神様。)です。昔は「久我社」といいましたが(かつて犀川の北岸に神社を建てたことから「久我」=「陸」の社といったのが名の由来。)、芹田上神社の項でも述べたとおり、明治11年に現在の名称に改称されました。



せりた なかじんじゃ
芹田中神社

きょだい どうそじん
巨大な道祖神



境内には安政2年(1855年)に造立された、この近辺では最も大きくて立派な道祖神の石碑がみられますが、この道祖神碑の裏面の刻字に注目してみましょう。「昭和十一丙子年四月再建 母袋組一同」と刻まれています。

この刻字を見る限り、昭和11年は1936年ですから、安政2年=1855年に建てられてから、80年ほどしかたたないうちに「再建」されたことになります。しかし、この道祖神碑は石で造られたものであり、雨風にさらされても、木造の建物のように比較的早く老朽化するものではないはずです。では、なぜ「再建」されねばならなかったのでしょうか？

筆者は以前、この刻字の「謎」について、昔からこの地域にお住まいの高齢の方に尋ねてみたことがあります。すると、その方は次のように教えてくれました。

「これは当時、どこの地区の道祖神にも負けないくらい、大きくて立派な神様にしようといっって建てられたのだが、それがしばらくして何かの拍子に倒れてしまった。ところがあまり大きすぎて、長いこと元通りに立て直すことができず、昭和11年になって、ようやく立て直すことができた。再建の文字は、その記録のために彫られたものだ。」

これを聞いてから、改めてこの道祖神碑を見てみると、表面に若干傷んでいる部分があることに気がつきました。あるいはこれは倒れた時についた傷かもしれません。

なお、境内には他に、造立年代不詳の庚申塔や「平和記念」の碑、流造の蚕神の石祠などを見ることができます。

①9 川合墾田神社

母袋から、さらに南へ進むと、川合新田地区に入ります。その名のとおりに、この地域では比較的新しく開かれた耕作地で、北村門之丞という人が中心となって17世紀前半頃から開発されました。

この川合新田地区の産土神として鎮座するのが「川合墾田神社」です。

この神社の祭神は天照大神（日本最古の伝統を有する神社である伊勢神宮の祭神で、この世を明るく照らし育む「日の大神」と称えられる神様。伊邪那岐命が左目を洗ったときにお生まれになった女神。）で、かつては伊勢社と呼ばれていましたが、明治14年、現在の名称に改められました。

「墾田神社」という名から、この神社は、特に農耕の安全や豊作を願って勧請された神社と思われまふ。川合新田では、犀川の洪水にたびたびあって耕地が流失した経過があり、それだけに、人々のこの神社に農耕の安泰を願う心にも、きわめて切実なものがあつたことでしょう。

境内にはいくつかの石造文化財がみられますが、中でも種字が刻まれた石碑（梵字塔）は、この近辺では珍しいものです。「アーンク」と読む梵字で、これは大日如来（空海＝弘法大師がひらいた真言宗において、特に重視する仏様で、万物の根本とされています。）を表すものです。

なお、明治8年（1875年）2月、この神社の境内に、芹田小学校の前身の一つである「川合学校」が置かれました。この学校は、明治19年（1886年）4月に中千田の専福寺にあった「励精学校」などと合併して「芹田学校」となるまでの約11年間、この地域の青少年の教育に大きい役割を果たしました。



「アーンク」の種字が刻まれた梵字塔



川合墾田神社

②〇 ^{り きゅうどうさ か い け じゅうたく} 利久堂酒井家住宅 ^{くにとうろくゆうけいぶん かざい} (国登録有形文化財／平成13年12月4日指定)

^{かわいこんでんじんじや} 川合塾田神社から ^{ひがし} 東に、^{やく} 約400～500 ^{まち なか} メートルほどの街の中に、^{りっぱ} 立派な ^{ながやもん も} 長屋門を持つ ^{やしき} お屋敷があります。これが、この近辺では唯一、^{きんべん ゆいいつ} 国の登録有形文化財（建造物）に指定されている「^{りきゅうどうさ か い け じゅうたく} 利久堂酒井家住宅」です。

このお屋敷は、^{やしき} 元々は明治時代に^{もともと} 医院を開業した^{めいじじだい} 旧家・^{い いん} 北村家の^{かいぎょう} 屋敷として建てられたものですが、^{しょうわ} 昭和57年に利久堂酒井家が^{ねん} 買い取り、^{か と} 今日に至っています。

(^{きたむらけ} 北村家は、江戸時代の^{え ど じだい} 17世紀前半頃から^{せいぎせんはんごろ} 川合新田を開発した^{かわいしんでん} 北村門之丞の一族で、^{かいはつ} 戦国時代の川中島の戦いの頃に、^{きたむらものじょう} 越後の上杉氏に従って^{いちぞく} 長野の地へ来たといわれる、^{せんごくじだい} 大変古い歴史を持つ家柄です。)

^{げんざい} 現在、「^{しゅおく} 主屋」、「^{ながやもん} 長屋門」、「^{どぞう} 土蔵」、「^{みそぐら} 味噌蔵」及び「^{およ} 庭塀」の5種類の建造物が登録有形文化財指定を受けています。いずれも明治20年頃(1887年)に^{めいじ} 建築されたもので、^{ねんごろ} 文化財としては比較的^{ねん} 新しい部類ですが、^{けんちく} 最近、近代(19世紀後半の明治維新以降)に^{ぶんかざい} 建築された文化遺産の価値が次第に見直されてきており、この「利久堂酒井家住宅」も、^{ぶんかいさん} そんな流れの中で、^{か ち} 平成13年12月4日に文化財指定されるに至ったものです。

ただ、これらの建物は、^{たてもの} 残念ながら通常は一般公開されていないため、^{ざんねん} いつ訪れてもよく^{つうじょう} 外観を見ることができるのは「^{いっばんこうかい} 長屋門」くらいですが、それでも、その豪壮な造り



^{もん} の門は、まるで大名屋敷のよう
^{だいみょうやしき} で、^{おお} 大いに見応えがあります。

(「^{ながやもん} 長屋門」とは、^{なが} 長い棟を持つ^{むね} 細長い建物＝^{ほそなが} 長屋の一部に門を^{たてもの} もう設けたもので、^{え ど じだい} 江戸時代の^{ぶ け} 武家^{やしき} 屋敷などに多くみられます。)

^{りきゅうどうさ か い け じゅうたく} 「利久堂酒井家住宅」の^{ながやもん} 長屋門

なお、^{ぶんかざいしてい} 文化財指定されている建造物のうち、「^{けんぞうぶつ} 庭塀」を除く建物はいずれも「^{にわべい} 切妻造」の^{のぞ} 屋根により建てられています。「^{たてもの} 切妻造」とは、^{きりづまづくり} 棟から^{むね} 両側に^{りょうがわ} 屋根が流れ落ちる形式(本^{や ね} を半分開いたような形)の^{や ね} 屋根の造りのことで、^{はんぶんひら} 日本建築の^{かたち} 屋根の基本形です。この形式^{つく} の建物では、^{にほんけんちく} 屋根が流れ落ちている側(建物の棟に^{や ね} 平行な側)の壁面を「^{きほんけい} 平」、その両端^{けいしき} の側(建物の棟に^{たてもの} 垂直な側)の壁面を「^{や ね} 妻」といい、^{がわ} 入口がそのどちらに付けられているかによって「^{へきめん} 平入り」と「^{ひら} 妻入り」の別があります。「利久堂酒井家住宅」の「^{りょうたん} 長屋門」の場合、もちろん「^{がわ} 平入り」ということになります。

まだまだあります！ 栗田とその周辺の歴史スポット

以上、今回の「栗田・鶴賀・高田・稲葉・川合新田編」では、20箇所の歴史スポットをピックアップしてみました。前回の「栗田・中御所・若里編」と併せると、計40箇所のスポットを紹介してきましたが、もちろん、それら以外にも、この地域には多くの歴史スポットが存在しています。少し余白がありますので、折角ですから、ここでさらにいくつかを簡単に紹介してみましょう。

* 栗田北中の石造文化財群（栗田）

北中公民館の脇に、多くの石造文化財がまとまって建つ一角があります。土地区画整理で平成21年に現在地に移転されたもので、道祖神2基、庚申塔2基、地藏菩薩石像1基、石祠1基が見られます。

ここで特に珍しいのは、文字も何も彫られていない、丸石の道祖神です。この形態の道祖神は、栗田の近辺では、ここでしか見られないものです。



* 「丹波島(市村)の渡し」跡（若里）

現在、丹波島橋がかかっているあたりは、江戸時代以前は北国街道の「渡し場」でした。当初はまだ橋はなく、旅人は両岸から張った綱にすがって歩いて渡っていましたが、やがて渡し舟となりました。その後、明治6年からしばらくの間は「船橋」が設置されており（川の水面上に船を並べ、その上に板を渡して橋とした）、明治23年になって、ようやくこの地に本格的な木橋がかけられました。

現在、丹波島橋のたもとには、旧街道当時の古い石灯籠が残されているとともに、そのすぐ北側の路傍には、先代の丹波島橋（鉄橋）の支承（沓）の遺構が記念として残されており、新旧それぞれの道の「歴史」の名残をとどめています。

* 南市の庚申塔（若里）

信州大学工学部の東にある若里南市の街中に、道祖神、庚申塔、二十三夜塔などの石造文化財がいくつか併せてまつられている一角があります。

なかでも庚申塔については、宝暦4年（1754年）に造立された割と古いもので、一面六手の「青面金剛神」（悪い病気を防ぐ神）と、その使いの三猿（「見ざる」「言わざる」「聞かざる」）などが彫られている、この近辺では他にみられない珍しい形式であり、小さいながら、なかなか立派で、一見の価値があります。



* 市村神社（若里）

市村（若里村の旧名）の産土神で、祭神は健甕名方命です。

かつては諏訪大明神といいましたが、明治11年（年）に現在の名称に変わりました。宝永年間（18世紀前半）に善光寺が再建された際の残材を用いて本社を造営したとの伝説があるそうです。また境内には、伊勢社、八幡社、稻荷社、水神社など10社もの石祠が並び祭られている一角があり、目を惹きます。

すいじんぐう わかさと
* 水神宮 (若里)

たんばしまばし ひがし さいがわき がん ていぼうそとがわ いっかく すいじん
丹波島橋のやや東、犀川左岸の堤防外側の一角に、水神などがまつられ
ちい ほこら すいじん しょうわ ねん わかさとの う ちかいこんくみあい
ている小さい祠があります。この水神は昭和13年に「若里農地開墾組合」
すいがい てんさい ぼうし きがん かんじょう
が、水害をはじめとした天災の防止を祈願して、勧請したものです。

すいじん どうそじん あわ まつ どうそじん
ここには、水神のほか、道祖神なども併せ祀られていますが、道祖神への
そな もの なか あき た ごりんとう さいじょうぶ くうりん ぶぶん てんよう
供え物の中には、明らかに他の五輪塔の最上部の「空輪」部分が転用された
おも きょうみぶか
と思われるものがみられ、なかなか興味深いものです。



しゃぐうじしゃ せきし いなばかみせんた
* 「社宮司社」などの石祠 (稲葉上千田)

かみせんたこうみんかん きたがわ せきし き いっかく む
上千田公民館の北側に、石祠が2基まつられている一角があります。向か
ひだりがわ しゃぐうじしゃ ほこら みぎがわ かいこがみ ほこら
って左側が「社宮司社」の祠、右側が「蚕神」の祠です。

しゃぐうじしゃ おもしろ なまえ やしろ しゃぐうじしん す わ じんじゃ かか
「社宮司社」とは面白い名前の社ですが、「社宮司神」は諏訪神社と関わ
ふか かみさま きんべん おお す わ じんじゃ
りの深い神様とのことです。この近辺に多くまつられている諏訪神社
けいれつ じんじゃ どうよう ちいき ひとびと ねが かんじょう
系列の神社と同様、この地域の人々の願いにより勧請されたものでしょう。

ながのけんちょうそんし ぼくしんへん さいじん すさのおのみこと せきし ぞうりつ
(もともと『長野県町村誌 北信篇』によれば、祭神は素盞鳴尊、石祠造立は
めいおう ねん ねん じじつ たいへん ふる
明応3年=1494年とあります。事実とすれば大変、古いものですが…)

せりたしもじんじゃ いなばひづめ
* 芹田下神社 (稲葉日詰)

いなばちく しみ つ じんじゃ
稲葉地区にまつられている「上」「中」「下」と付く3つの神社の
ひと じんじゃ す わ じんじゃけいとう
うちの一つです。これらの神社は、いずれも諏訪神社系統であり、
ひづめ せりたしもじんじゃ さいじん みなかたとみのみこと す わ じんじさいじん
ここ日詰の「芹田下神社」の祭神も、南方止美命 (諏訪神社祭神・
たけみなかたのみこと べつめい すわしや
健御名方命の別名) です。そのため、かつては「諏訪社」といわれ、
じんじゃ じんじゃ ぞく とみ みや
また、ミナカタトミノミコトの神社というので、俗に「富の宮」と
めいじ ねん げんざい めいしやう あらた
もいわれてきましたが、明治11年に現在の名称に改められました。



じぞういん いなばみなまた
* 地蔵院 (稲葉南俣)

みなまたじんじゃ ひがし まちなか じょうどしゅう ちい てら
南俣神社のやや東の街中にある、浄土宗の小さいお寺です。

な いんまえ じぞうぼさつ せきぞう き あんち
その名のとおり、院前には地蔵菩薩の石像が2基安置されているほか、いく
せきぶつ さいきん すく むかし そぼく まちかど
つかの石仏がみられます。最近では少なくなった昔ながらの「素朴な街角」
ふん いき いま せつ きちやう
の雰囲気に今も接することのできる、貴重なスポットです。

たかまつのみやでんかおなりきねん ひ くりた
* 「高松宮殿下御成記念」の碑 (栗田)

みのちそうしゃひよしだいじんじやほんでん ひがしわき くりたじょうあと だるいいこうじょう
水内惣社日吉大神社本殿のすぐ東脇 (栗田城跡の土塁遺構上) にあります。
しょうわ ねん たかまつのみやでんか とうち こ きねん よくとしせつち
昭和11年に高松宮殿下が当地に來られたことの記念に、翌年設置されました。

たかまつのみやでんか たいしやうてんのう だいさんおうじ のぶひとしんのう たいしやう ねん たか
高松宮殿下は大正天皇の第三皇子・宣仁親王で、大正2年 (1913年)、高
まつのみや しょうごう ありすがわのみやけ せいきなかごろ つづ しんのうけ ひと けいしやう
松宮の称号により有栖川宮家 (15世紀中頃から続く親王家の一つ) を継承さ
きゆうかいぐん しょぞく しゅうせんじ こうせんは せつとく どりよく
れました。また旧海軍に所属し、終戦時には抗戦派の説得に努力されました。



【 参 考 文 献 】

- 『長野縣町村誌 第一卷 北信篇』(長野県編／1936 年／復刊 1973 年・名著出版)
- 『古事記』(倉野憲司校注／岩波書店刊 1963 年)
- 『善光寺平』(小林計一郎著／角川書店刊 1967 年)
- 『路傍の石仏』(武田久吉著／第一法規出版株式会社刊 1971 年)
- 『改訂 長野市の文化財』(長野市教育委員会編／長野市の文化財図録刊行会刊 1971 年)
- 『仏像』(青山茂・入江泰吉 共著／保育社刊 1972 年)
- 『創立百周年記念誌』
(芹田小学校創立百周年記念誌編集委員会編／芹田小学校創立百周年記念事業推進委員会刊 1973 年)
- 『蓼科ハヶ岳山麓 道祖神』(矢嶋齊著／笠原書店出版部刊 1977 年)
- 『長野市の石造文化財(第 1 集)』(長野市教育委員会編／1978 年)
- 『図解 文化財の見方 歴史散歩の手引』(人見春雄ほか編／山川出版社刊 1984 年)
- 『角川日本地名大辞典 20 長野県』(角川書店刊 1990 年)
- 『信州の神事』(長野県神社庁監修／銀河書房刊 1990 年)
- 『信州の城と古戦場 24 版』(南原公平著／令文社刊 1997 年)
- 『長野市誌』(長野市誌編さん委員会編／長野市刊)
- ・ 第 2 巻 歴史編 原始・古代・中世 (1997 年)
 - ・ 第 8 巻 旧市町村史編 旧上水内郡 旧上高井郡 (1997 年)
 - ・ 第 10 巻 民俗編 (1998 年)
 - ・ 第 12 巻 資料編 原始・古代・中世 (2003 年)
 - ・ 第 16 巻 歴史編 年表 (2005 年)
- 『日本の神様 読み解き事典』(川口謙二編著／柏書房刊 1999 年)
- 『長野県の文化財－長野県文化財総合目録－(平成 16 年 3 月 31 日現在)』
(長野県教育委員会監修／財団法人八十二文化財団刊 2005 年)
- 『歴史探訪に便利な日本史小典 6 訂版』(日笠山正治編／日正社刊 2008 年)
- 『「歴史的魅力ある重要物と思われる物」の調査報告書』
(文化財的物件等調査 その 1／栗田まちづくり協議会 歴史文化研究部会 2012 年)

〈 本冊子作成のねらい 〉

先に作成した「栗田・中御所・若里編」では、主に栗田の西～南のエリアをとりあげましたが、今回は、北～東のエリア(栗田・鶴賀・高田・稲葉・川合新田)を中心にまとめてみました。

結果、紹介範囲は先の「栗田・中御所・若里編」に比べて、かなり広いエリアに及び、一度の探訪で全てを見て回るには、ややハードコースとなってしまいましたが、その分、何度かに分けて歩き、じっくりと郷土の歴史を見つめ直していただければと思います。(H・Y)